

# 私が幼児教育を志した頃(17)

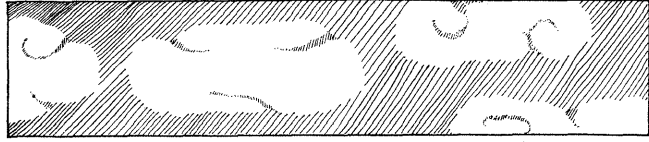
## ―第二次世界大戦直後の 普通のアメリカ人の精神風土―

津守 真

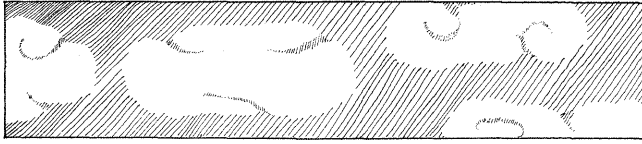
アルバータ・トンプソン夫人と北川大輔先生

一九五二年七月十二日に私はトンプソン家に引越した。

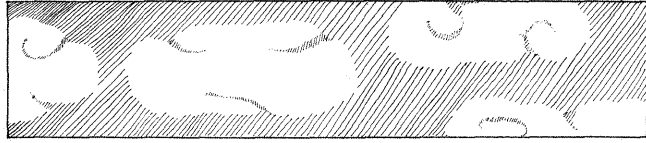
最初に述べたように、アルバータ・トンプソン夫人と北川大輔先生は、私の米国留学の契機となった方である。北川先生は戦争中日系人強制収容所のチャプレンをしておられたが、私の留学当時はミネアポリス市のヒューマンリレーション委員会のチエアマンをつとめておられた。トンプソン夫人も同じ委員会の委員だった。



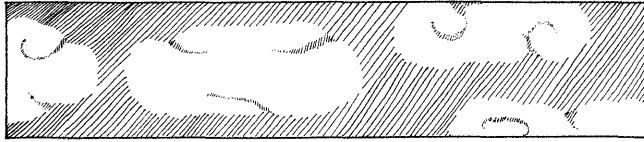
ここで北川先生について、一言述べておきたい。北川先生は一九四一年の日米開戦まではシアトルの近くの平和な村の教会で牧師をしておられた。真珠湾攻撃の翌朝、シアトルに住む日本人会の主だった人達が連邦警察により検挙された。それは日本とアメリカが戦争状態に入ったという以外に何の根拠もないことだった。日系人をそのままの場所に住まわせておくことは国家の安全を脅かすことになるという無責任な噂話や宣伝が世論となって、一九四二年五月に、強制立ち退き令により、日系人達は行く先も分からずに汽車で収容所に送られた。ナチのホロコーストとは事情が違うけれども、何十年も住んでいた家屋も家財道具も没収されて、どこに行くのかも分からずに汽車に乗せられて金網の中の強制収容所に送られた人々の集団心理には共通のものがあつただろう。その瞬間から「私（北川大輔）の人生は私自身のものであることを停止してしまった」と後に先生は書いておられる（注 北川大輔著『一世と二世―強制収容所の日々―』伊達安子訳、聖公会出版、一九八六）。先生と親しくおつきあひした私は、日頃のことからそれが良く分かった。本来学者肌の人が、日系人がアメリカの社会に受け入れられるための実務に専念する人となった。当時のアメリカでは、日本人は真珠湾攻撃のやり方が示すように卑劣で危険な存在であるという考え方が次々とエスカレートして、日本人と親しくしてい



た白人も当局から疑われるほどになり、日本人は物心とも戦時アメリカの社会で苦境にあった。こういうアメリカ人の病的興奮状態のなかにあつても、「日本人との長い間の個人的交流があつた人達は、日本人のため喜んで証人となり、労力を惜しまなかつた。そのような友人達の心強い言葉や行為は、日増しに悪化して行く世論の一般状況に打ちひしがれそうになる日本人を守ってくれた。」「強制収容所の鉄条網に囲まれた長期にわたる生活の最中、——バスの中で読み始めたポール・ティリツヒの論文『嵐の時代』に私（北川大輔）は深い感動をおぼえた。それを読むことが神意のように思われ、文字通り行から行へと私は貪り読んだ。——ティリツヒの論文は、戦時中のアメリカ人のヒステリー状態によって、またそれに対処するアメリカ政府の集団馬鹿騒ぎによって、また高度に組織化された利益集団の故意の策謀によって引きおこされた災害の犠牲者の一人である私を、一つの世界大社会に向かつて前進する現代史を担う一員に変えてしまった。」アメリカ社会には、ヒューマニズムに真つすぐに向き合つて前進する善の面と、偏見にヒステリックに反応する悪の面と両方があることは、現代も昔も変わらない。私が知り合つた頃の先生は、いつも日系人たちの果てしない書類を書きながら、訥々とだいたいなことを話された。



一九五〇年のアメリカは現代とは違い、黒人や少数人種に対する差別が行われていた。ミネソタ州は歴史的に進歩的ヒューマニズムの伝統があり、南北戦争の時には南部から逃げてきた黒人をいち早く受け入れ、以来、多くの黒人がここに定住した。ヒューマンリレーション委員会は、第二次世界大戦直後、人種的偏見のために住宅や職業を得るのに困難していたマイノリティの人達の世話をするのを主目的とした市長の諮問委員会だった。北川先生はトンプソン夫人と労を共にし、互いに信頼し合っていることは、トンプソン家でコーヒーを飲みながら話す先生を見れば、すぐに分かった。黒人を「黒人の重荷」と見ている白人は、まさにその事実によって、白人自身が「黒人の重荷」になっていることを二人とも知っていた。だけれども、直接に会い、話を聞き交わる機会をもつならば、偏見から解放され、互いに人間として理解し合えるようになるというのが二人の共通の信条だった。北川先生は、私が初めて汽車でミネアポリスの駅に着いたときから、私を米国の人々の間を連れ回って紹介してくださった。「アメリカ人は、人と人との信頼を大事にする。一度信頼を得れば生涯つづく。食事の時間に遅れるときにはかならず電話をするように」と最初に言われたことはいつも私の心に留まっていた。北川大輔はアメリカの友人の間では「ファーザー・ダイ」と呼んで親しまれていた。ファーザー・ダイの紹

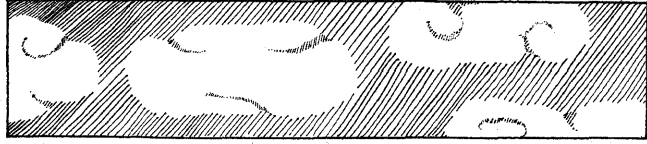


介ということ、私はどんなに得をしたか分からない。

### トンプソン家

こういう進歩的な運動をしているからと言って、トンプソン夫人は特別な女史ではなく、ごく普通の家庭人であった。ご主人は鉄道会社に勤める会社員で、モントナ、ダコタなどミッドウエストで働いてこられた。話し好きで、台所にはいつも薄いコーヒーが沸かしてあって、朝はおしゃべりから始まった。毎週月曜日は洗濯日で、私も下着を籠に入れておくと夕方には乾いていた。日本にはまだ洗濯機も電気冷蔵庫もなかった時代であった。ご主人のケネスは、この美人で活動的な奥さんを尊敬しきっていた。外国人留学生達が来たときなど、夫人が座談の中心で、ご主人は相槌をうっていつも夫人の傍らに付き添っていた。

トンプソン家は、ミシシッピー川のほとりにあった。美しいミシシッピーの流れは、冬になると表面はすっかり雪に蔽われ、春になって氷が溶けると若葉が萌え、たちまち濃い緑の夏になる。秋には一斉に木々が紅葉して二週間ほどの間に冬が訪れて、一面に灰色の樹木になってしまう。私がトンプソン家に泊まっていたのは、七月から八月で、毎日夕食が終わると、私はミシシッピーのほとりに出て、美しい

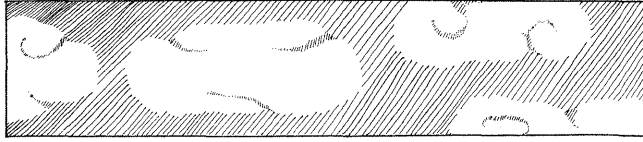


空と水を眺めた。夏の水辺は蚊が多い。おびただしく群がる蚊を追い払いながら歩くと私は日本の夏を思い出した。

### ミセス・ロング

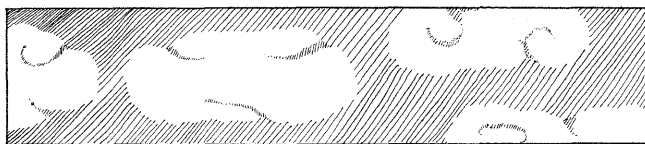
ミセス・ロングは、トンプソン夫人の母親で、八〇歳を超えていた。三〇年前にご主人を亡くし、長年モンタナに住んだ。ときどきミネアポリスに出て来て息子娘達の家に泊まった。歩くのが大儀だったが、まだまだ元気で、私がトンプソン家に滞在していたときにはここに一緒に住んでいた。モンタナ・ダコタと言うと、東部のアメリカ人にとっては遙か西部で、開拓移民が幌馬車に乗って行った大草原の真ん中である。ミセス・ロングは典型的なパイオニア気質の老婦人で、敬虔な宗教的感覚の持ち主だった。反面ユーモアに富み、私は大学から帰るといつも揺り椅子に腰掛けていたミセス・ロングと世間話をするのが楽しみだった。

トンプソン家に行つて間もないころ、私は私の父の家がアメリカ軍に接収されていることを話したことがあった。そのときのミセス・ロングのきつい口調を忘れることはできない。「それはあなたのお父さんが建てた自分の家だろう。他人の家を取る権利が一体どこの国の誰にあるのだ。もしもそう言うことが行われるならば、



それは正義に反する。何人であろうと、個人の財産に手を触れる権利はない。」自分たちの手で原野を切り開いて家を建て家庭と生活を作る。そうして自分たちの勤労と努力で築いたものは自分たちのものであることを確固たる調子で断言する自信と信念とをこの八〇歳の老婆はもっている。戦争に敗れた私共にとっては、占領軍が家を占領するのは当たり前のように思っていたが、こういう人達に支えられたアメリカの軍隊だから私の家が接収されても個人的には人間的なつきあいができたのだと思う。

ある日、こんなことがあった。トンブソン夫妻とミセス・ロングは知人を訪ねて外出し、私は試験の前日で一人家にいた。本を読んでいたら突然どこかでがさごそ音がした。アメリカの家には、当時の日本の家のようにネズミはいないし、リスが戸口でいたずらしているのかと思っていた。トンブソン夫人は毎朝台所のドアをあけてリスに餌をやっていた。はじめは気にしなかったが、留守中に泥棒が入ったかと心配になり、家中の電灯をつけて調べたがその気配はない。気のせいかと居間の椅子に戻って本を読み始めたらとたんに私の目の上を鳥のようなものが羽音をたてて飛んだのである。見ると黒いものがすーと部屋の中を飛んだ。戸を開けて街灯をつけて二十分くらい見ていたが、何も外に出て来なかった。皆が帰って来てその話



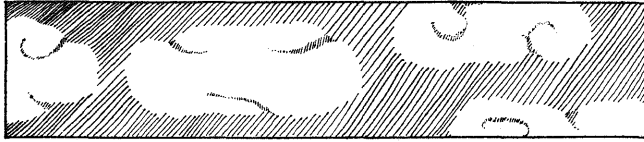
をしたが、私がホームシックで夢でも見ていたのだろうかということになって、皆で大笑いして、それぞれ自分の寝室に戻った。それからしばらくして、ミセス・ロングがガウンのまま部屋から出て来て、自分のベッドルームに誘い、にやにやして良いものをみせてあげようと言って、壁の隅を指さした。何とそれは「こうもり」だった。それから大騒ぎしてケンネスと私とで箒でこうもりをドアの外に追い出した。以来、ミセス・ロングは、人を見る度に、この家では寝る前に壁をひとわたり見回してから寝ないと、こうもりに顔をなめられるぞと言ってからかった。このこうもりはどうも煙突から暖炉に降りて来て家に入り込んだらしい。

### トンブソン夫人のおしゃべり

トンブソン夫人はよくしゃべる。

昨日は教会の帰りに、夫人の友達のラシーヌさんの家に寄った。ケンネスと私も車からおりに来た。一、二分で帰ると言っていたのに、その一、二分の長いこと。ケンネスが時計を見て、もう四時だ、四時半だというのに知らん顔で話が続き、結局その家を出たのが六時半だった。よく飛び入りの客があるが、一、二分と言いながら二、三時間もいることが珍しくない。トンブソン家に泊まっている

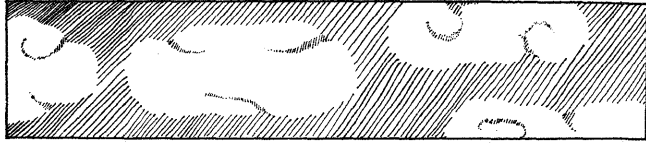




とそういうおしゃべりにもつきあわなくてはならなくて、私は閉口したが、その中にも大事な話があった。一昨日は、ラバンコラジというユーゴスラヴィアの人が来ていて、一九四〇年にヨーロッパでローマカトリックとギリシヤカトリックとが互いに虐殺しあった話を聞いた。どちらもキリスト教徒である。こういう話を聞くと日本人が異教徒であることを有り難く思った。異教徒でありつつけながら聖書を読むことの重要さを説いた内村鑑三は日本の風土の生んだ基督教徒であることを思った。

### ダンの入営

トンブソン家の一人息子ダンのところに八月五日に徴兵令状が来た。八月十八日の入隊だった。ダンにはミネソタ大学二年生に在学中で音楽を専攻し、ダンの部屋からはパーカッションとシンバルの音がいつも響いていた。軍楽隊に入りたくて海軍を志願したのだが、入隊直前のダンはいらいらしていた。八月十日はダンの誕生日で、今度徴兵される友達が二人と親戚が夕食に来た。これから四年間軍隊で過ごさねばならないことを考えて、だれもが沈んでいた。私は自分が軍隊に入隊したときの体験を話し、皆が特別に熱心に耳を傾けた。



ダンの入隊の当日、トンブソン夫妻と私はミネアポリスの汽車の駅まで送って行った。勿論、出征兵士を送る駅頭風景などない。皆勝手にシカゴまで行く。他にはだれもそれらしい姿は見えなかった。トンブソン夫妻は普通の旅行者がするよう  
に、ダンと抱き合って涙を流した。ダンが入隊してしばらく、ミセス・ロングは、  
毎日「可哀想なダン、あんなに軍隊を嫌がっていたのに」と言っていた。

私の父は、ダンの入隊を聞いて、息子を軍隊に送る親の気持ちを伝えて、トンブソン夫人に長い手紙を書いた。そのことは久しい間、皆の話題になっていた。